

学校名		佐賀大学教育学部附属中学校	達成度（評価） A：十分達成できている B：おおむね達成できている C：やや不十分である D：不十分である
1 前年度 評価結果の概要	・「心の教育」について、道徳では、様々な取組に対し一人一人が真摯に向き合い、日々の生活でも実践した。今後は生徒主体の活動に継続して取り組み、一人一人の人権感覚を学校全体で向上させていきたい。いじめの早期発見・早期対応に関しては、連携を大切にし体制の充実を図った。今後も継続して、生徒がより相談しやすい環境づくりを行っていく。キャリア・パスポートについては、施策2年目としては、一定の成果が得られた。保護者への理解と協力について検討する必要がある。 ・「健康・体づくり」では、運動実施の二極化が目立った。体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係について理解を促し、習慣化へつなげていきたい。また、スポーツ振興センターの申請件数は減少したものの、軽微な怪我は少ない。例えば運動器検診調査票の考察や、家庭で出来る運動など体育科や部活動顧問とも連携しながら、けがをしにくい身体づくりなどの啓発を行っていく必要がある。 ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」では、各種業務の見直し、行事の精選、部活動指導員制度の導入により、職員の業務改善及び時間外勤務の削減につながった。各種業務の見直し、行事の精選については、Microsoft Formsを活用し振り返ったり、定期の会議で協議したりしながら、見直し、精選を図った。部活動指導員制度に際しては、研修会や鍵の管理、報告書の作成など、環境整備に取り組んだ。保護者のアンケートでは、働き方改革推進及び本校の質の高い教育活動への理解を十分に得ることができており、今後もより一層教育活動の質の向上を目指して、業務改善を図る必要がある。 ・「教育実習」では、実習生が達成感を得られるような指導を行う。大学教員による視察・指導については、研究授業に特化せず日程を調整していくなどの改善を図る。 ・全体的に概ね達成できており、成果が見られる。コロナ禍の中で、柔軟に対応してきた点については、引き続き継続していくべきである。働き方改革が進む中で、より一層質の向上を図る必要がある。		

2 学校教育目標	自律し、共同することができる次世代リーダーの育成
----------	--------------------------

3 本年度の重点目標	① 「質の高い深い学び」の実現を通して、社会で生きて働く資質・能力の育成を目指す。 ② 学校教育全体を通して、命や人権を大切にする指導を行い、生徒の心と人権感覚の育成を目指す。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標				5 最終評価			
(1) 共通評価項目							
重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	◎探究的な学びの充実及び教科等間の学びを往還させ、「質の高い深い学び」を実現する。	○各教科等横断的な視点をもった指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価により得られた結果などを次期計画の修正に生かす教員90% ○学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると考える生徒90% ○どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかを明らかにし、粘り強く問題の解決にあたることができる生徒90%	・課題を解決するにあたり、働かせたい見方・考え方を明確にし、その手立てが組み込まれた学習指導の実践 ・課題設定や話し合いの場の機能、振り返り、評価方法等の工夫 ・小中で探究的な学習における指導方法の共有とその在り方を検討する場の設定 ・各教科等における単元または年間指導計画を教科横断的な視点をもって見直す ・課題解決へのアプローチの明確化及び他者との協働による最善解の追求	A	・各教科等横断的な視点をもった指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価により得られた結果などを次期計画の修正に生かすことのできた職員は89%であった。 ・学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると考える生徒が93%であった。 ・どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかを明らかにし、粘り強く問題の解決にあたることができる生徒は93.1%であった。また、協働しながら、自分の考えを広げたり深めたりできていると捉えている生徒が96%と高かった。 ・同様の質問項目で保護者の回答は88%、91%を示した。 ・肯定的に捉えている割合がとても高いため、次年度も継続して学びの質を高めつつ、学ぶ価値の充実につなげていきたい。 ・どの項目においても概ね高い評価を得られたためA評価とする。	A	・アンケート結果から、「質の高い深い学び」の実現について肯定的な受け止めが顕著に現れていて、取り組みの成果が高く示されていると考える。数値目標についてもほぼ達成していると捉える。保護者からの回答も高いことは学習指導への高い信頼を受けていると評価する。 ・生徒の協働的な学びとともに、教員間の指導方法の共有をさらに活発にすることで多様な指導方法を提示できると考える。加えて、探究的な学びにより得られた生徒の意欲や達成感或いは成長の実感をさらに向上させるために、教科横断的な視点からの新しい課題設定に向けた取り組みを来年度も継続していただきたい。

様式1(小・中)

		◎ICT活用を通じて、個に応じた指導方法、学習時間、教材等を豊かで柔軟に提供する。	○各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した授業で、個に応じた指導を実践できる教員90% ○ICT機器を活用した学習において、考える力が高まったと感じる生徒90% ○生徒用パソコンを利用することで情報を処理したり、表現したりする力が高まったと感じる生徒90%	・教科固有の見方・考え方を働かせるために、ICT機器を効果的に活用する学習指導の実践 ・生徒用パソコンでの教材の提示を工夫し、個に応じた学びの場の設定 ・課題に対して考えを深める場面で、協働的な学びの場の設定 ・探究的な学びにおいて、情報を適切に処理したり、表現したりする力を高める指導の工夫	B	・各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した授業で、個に応じた指導を実践できる教員95%を超えた。また、ICT機器を用いて、自分の興味・関心に応じた学習や、学習の進度に合わせて知識・技能の習得に取り組むなど、個に応じた学習が行えたかの回答に肯定的な回答をした生徒が94.7%であった。また、ICT機器やタブレットPCを授業で活用することで、情報を処理したり、表現したりする力が高まったと感じますかの回答に肯定的な回答をした生徒が84.7%であった。 ・目標値より下がった要因としては、生徒たちのICT機器活用が一定のレベルに達し、より高い処理力・表現力の域を目指しているからこそではないかと考えられる。 ・引き続き、課題に対して考えを深めるような場面を多く設定し、さらにICT利活用の充実を図っていきたい。また、生徒たちの求めるより高い処理力・表現力の域に達するように、教員のICTを活用できる能力を高めるための研修等を行っていきたい。	B	・アンケートへの生徒の肯定的な評価が多数なことから、教員のICT活用による学習指導の成果は高く評価されると考える。生徒のICTスキル向上に向き合える授業での課題設定の高度化をはかり学びの伴奏者となれるよう、教員のICT活用力の向上に努めてほしい。 ・豊かで柔軟な教材を提供することを目指していくのは、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を進め生徒自ら選び、学ぶ力を育成するために大切なことと考える。教材の開発とともに提示方法にも工夫をしながらにもさらに取り組んでいただきたい。
●心の教育		●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした生徒85%以上	・各教科の授業で、お互いが認め合えるような場の設定 ・学年職員のローテーションにより、組織的かつ計画的な道徳教育の実施 ・人権週間において、命や人権について考える機会を設置 ・夏季に人権・同和教育に関する職員研修を実施	A	・道徳に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした生徒が95%、保護者が87%であったため、十分達成できたと考える。 ・次年度も豊かな心を育成していくために、互いを認め合う場や命や人権について考える機会を設定していきたい。	A	・社会との接点の持ち方がますます多様化し、生徒の倫理観に対する判断力の醸成がこれからは益々重要だと考える。様々な場面でこれまで以上に個人の倫理観を求めてくる社会を生きるため、SNSなどの情報ソースを正しく受け取る力や正しく使う力、社会の多様性へバランスを持った配慮ができる考え方を育てるなど、学校にはこれからも高い意識を持って生徒と共に取り組んでいただきたい。
		●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめの防止など(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的に対応ができていると回答した教員、生徒ともに85%以上	・心の扉(月1回)、いじめ実態調査(年3回)、教育相談等による生徒の状況の把握 ・生徒主体学活による人権学習の実施、生徒会と連携し、いじめゼロ宣言を活用するなどして、いじめを許さない心の育成	A	・いじめの防止に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をしている生徒が90%を超えていたため、十分達成できたと考えられる。次年度も継続して生徒とともに、安心して過ごせる環境をつくっていく。また、そのためにも心のノートなどを活用し、日々の生徒の実態把握に努めていきたい。	A	・学校内外の生徒を取り巻く生活環境や、ジェンダーへの理解、SNSで広がる情報への安易なアクセスによる被害リスクなどの複雑な社会背景の中で、いじめの早期発見と早期対応は、状況の悪化を防ぐ第一歩である。これまでと同様の配慮をしながらの生徒の状況把握、生徒とのコミュニケーション、日頃の観察などを通じて、いじめへの取り組みを丁寧に進めていただきたい。生徒との交流の時間が少しでも多く作れることを期待する。
		◎キャリア発達を促進するためのキャリア・パスポートの充実	○「キャリア・パスポートを作成することで、自分を振り返ることができた」について肯定的に回答した生徒85%以上	・キャリア・パスポート作成の意義の説明 ・年度当初、行事後、学期末での実施 ・年度末の振り返り	A	・キャリア・パスポートの効果を確認するアンケート調査で、肯定的な回答をした生徒が87.7%であり、中間結果と同様に十分達成できたと考える。しかし、保護者へのアンケートでは肯定的な回答は69.5%となった。キャリア・パスポートについては、学校生活を通しての成長を見とることができるものになるので、保護者にどのように発信していくかが今後の課題になる。	A	・附属中学校での活動全般の様々な場面で生徒たちに気づきや学びがあり、それらの蓄積が学習面だけではなく生きる力全体を構成していると考え、キャリア・パスポートの作成はその道筋を自ら振り返りながら自己調整をする機会だと思う。それと同時に自己の成長についても考える機会と思う。そのためにも家庭との共有の機会は大切であるので、実施結果に記述された課題について改善に向けたご検討いただきたい。
●健康・体づくり		●運動習慣の改善や定着化	○健康・体づくりに運動習慣は大切と考える生徒80%以上 ○授業以外で運動やスポーツを行う時間の合計が、1週間で90分以上の生徒80%以上	・運動習慣形成に関する意識調査 ・運動時間や週当たりの運動頻度の実態調査 ・調査結果と体力の関係を説明し、運動習慣の改善を推奨	B	・健康や体力向上に運動が大切と考える生徒は97%であった。 ・授業以外で運動を行う時間の合計が週当たり60分以上の生徒は56%であった。 ・学級指導や部活動指導の中で、生活の中に運動習慣を取り入れることの大切を指導することができた教員は78%であった。 ・子供の健康や体力づくりに意識して改善に取り組む保護者は70%であった。 以上のことから、健康増進や体力づくりの意識は高いものの、運動習慣へ結びついている生徒が少ないことがわかった。要因としては中3が受験期ということが影響したと考えられる(中3のみ24%)。運動習慣が定着化できるような体育的行事を生徒会や保護者、地域と連携をして積極的に取り組んでいきたい。	B	・アンケート結果は生徒の生活様式を正直に表していると捉える。保護者の認識も同様。運動する時間を持つには、生徒に限らず意識的な取り組みが必要になると思う。運動は身体的な健康維持だけでなく脳における認知機能の維持にも生涯を通じて大切であり、中学生のころから運動の習慣を身につけることは、家庭や地域と連携して取り組む必要があると考える。成長過程の睡眠とも関わる。部活動の社会クラブ化を進める中で、学校は生徒の健康についてどのように向き合うべきか、新しい課題として捉える必要があると考える。
		●基本的生活習慣の意識化と定着	○県が実施する「健康に関する意識調査」で、「健康において運動、食事、睡眠は大切」と考える生徒90%以上	・保健室来室時、生徒自身が生活リズムを見直すなど個別指導の実施 ・長期休業前の保健指導や、学年育友会を通じて家庭への啓発 ・生徒会健康づくり部と連動した啓発活動	A	・県が実施した「健康に関する意識調査」では、99%の生徒が「健康において運動、食事、睡眠は大切」と回答し、本校の昨年度の結果より意識が向上した。さらに、食事や睡眠を中心とした基本的生活習慣が実践できている生徒が全体で90.3%と、昨年度より向上している。中でも、中間評価では他学年よりポイントが低かった中3の結果が受験期を前に93.9%と高く、受験期の過ごし方について、保護者のサポートや教職員の声掛けが健康管理の大切さを見直すきっかけになったと考える。	A	・感染症に対する考え方も整理され学校生活の環境が戻ってきている。健康への意識が向上していることはとても良いことで、知性と身体の健全なバランスのために取り組みを続けてほしい。「新しい生活習慣」というフレーズも古くなっているが、未だ不安を覚える生徒もいると思う。保健室での指導をはじめ、家庭へのサポートや生徒自ら考える機会を作るなどして健康意識を育て、これからの生活に必要な生活習慣の定着と自己コントロールの力を身に付けていくことを期待する。

●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	○昨年度の時間外勤務の平均時間を下回る。 ○アンケートをデジタル化する。	・退勤時間の揭示、アナウンス ・業務内容精選、見直しのための会議設定 ・部活動指導員制度の見直し ・課外活動の検討	B	・時間外勤務時間の削減に努めることができたか、業務内容を精選したり、見直したりすることができたかという質問に対し、肯定的な回答が、職員ではそれぞれ78%、67%、また保護者の働き方改革推進への理解と質の高い教育活動への取組に対する理解は、肯定的な回答が82%であった。中間評価から低くなった要因として、コロナ禍のときには、縮小されていた学校行事が再開され、活動時間が長くなったことが原因の一つだと考える。より一層の業務の精選をしていくとともに、令和8年度の部活動募集停止に向けて、保護者の方々に説明会を実施し、理解を得ながら推進していく必要がある。また、課外活動の充実を図るために大学等と連携を取る準備を進めていく必要がある。	B ・働き方改革が求められる中で、附属学校の役割である「教育実習」「教育研究」「研修機能」を果たしていただきたい心より感謝申し上げます。 ・部活動廃止は、学校としての最も大切な生徒との日常を失うことなく、附属中学校の創造的な取り組みを続けていくために必要な施策であると考えます。業務の精選、部活動の社会化を含む教育活動への保護者の理解促進を継続するとともに、大学との連携や学校のチーム力或いは先生方のセルフマネジメント力を働かせていただきながら、引き続き取り組んでいただきたいと存じます。
---------------------------	-----------------------------	---	--	----------	--	--

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○教育実習	○実習生の指導技術の向上や達成感を保障する実習指導の充実 ○大学との連携	○教育実習後のアンケートで達成感・充実感があると回答をした実習生80%以上 ○教育実習中の大学教員による視察・指導の達成80%以上	・指導教員による魅力的な教職モデルの垂範 ・実習日誌等を通した、実習生の達成感や成長の様子の確認及び指導・助言 ・大学教員との情報共有	A	・アンケートで達成感・充実感が「とてもある」と回答した実習生は74.6%、「ある」と回答した実習生をあわせると100%となり、十分達成できている。 ・教育実習中の大学教員による視察・指導(主免教育実習)は92.6%に伸びた。コロナウイルス感染症が5類になったことをきっかけに制限なく参観できたことが大きいと思われる。	A	・これまでの教育実習へのご協力に感謝いたします。教育学部の学年進行に伴う教職意欲の低下の傾向は、引き続き課題となっている。教職を目指す学生にとって附属学校が目標となる学校現場となるよう、教育実習における学部と附属学校の連携を密接にしなければならない。ICT活用力の育成、特別な支援を必要とする児童生徒への指導力育成も必須である。学部学生が附属中学校の取り組みに刺激を受けながら教職への好奇心と意欲を持ち続けるよう引き続きお願いいたします。
○研究	○深い学びを実現するための学習過程モデルの開発及び実践 ○探究的な学習を中核としたカリキュラム・デザイン	○各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、深い学びの実現を目指した授業実践に取り組んだ教員90% ○実社会・実生活における問題または教科等の枠を超えて探究する価値のある課題の解決に向けて、各教科等で学んだ見方・考え方を総合的に活用・発揮できるよう意図的な単元配列のもと計画的に指導した教員90% ○基礎学力(基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等)を育成するための研究を推進した教員90%以上 ○仲間と協働しながら、粘り強く課題を追求し、自分の考えを広げたり深めたりすることができている生徒85% ○社会で生きて働く資質・能力を授業や諸活動を通して高めることができた生徒85%	・小中連携の視点に基づく授業づくり ・見方・考え方を働かせるための手立ての追求 ・学習過程モデルの活用・実践 ・総合的な学習の時間(探究的な学習)の充実 ・総合的な学習の時間における資質・能力デザインの開発と利活用 ・探究的な学習を中核とした教育課程の編成(グランドデザイン、単元配列表、単元指導計画)	A	・「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、深い学びの実現を目指した授業実践に取り組んだ教師は94%であった。 ・各教科等で学んだ見方・考え方を総合的に活用・発揮できるよう意図的な単元配列のもと計画的に指導した教師は72%であった。 ・基礎学力を育成し、社会で生きて働く資質・能力を高める研究を推進した教師は94%であった。 ・仲間と協働しながら粘り強く課題を追求し、生徒が96%であった。 ・社会で生きて働く資質・能力を高める活動が充実していると答えた生徒は92%であった。 ・実際に参観したり、通信等をみたりすることで、本校の研究及び授業実践を肯定的に捉えていただいている保護者は85%以上と肯定的に捉えていただいている。 ・研究主題を達成するための授業実践を職員間で共有するなどの手立てをとり、全職員で研究に取り組んでいきたい。 ・中間評価から下がっている項目もあるが、成果指標に対して全体的に上回っているためA評価とした。研究の方向性を職員と共有して、全職員で取り組んでいきたい。	A	・アンケートの回答から先生方の教育と研究についての高い目的意識を拝察でき、授業実践への創意工夫に不絶の努力で取り組んでいることがうかがえる。生徒の受けとめも高い数値を示しており、また保護者の学校への理解も高く、附属中学校の研究活動は成果を揚げている。研究発表会の授業は多くの示唆を含んでおり、参観者にとって大変有意義な時間となっている。引き続き精力的な研究を期待するとともに、その成果の発信についても工夫をお願いしたい。多様な評価を受け、さらにブラッシュアップされた内容へ展開されることを期待する。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	・「学力の向上」について、研究3年目である「社会で生きて働く資質・能力の育成」や「質の高い深い学び」の実現に向けて、一定の成果は残せた。また、ICTの利活用については、教員によるICT機器を効果的に活用することができた。生徒は授業や実行委員会、学校行事で端々の仕様が普通になってきており、自分の考えを表現することや情報を処理することに更なる向上を望んでいる。生徒たちの求めるより高い処理力・表現力の域に達するように、教員のICTを活用できる能力を高めるための研修等を行っていきたい。 ・「健康・体づくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、中学3年生は受験期ということもあり、運動する習慣が少なかった様子である。中学1、2年生も決して高い値ではないため、体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係について理解を促し、習慣化へとつなげたい。 ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、コロナ禍のときには、縮小されていた学校行事が再開され、それぞれの活動時間が長くなったことが要員である。時間外の勤務時間については昨年に比べて減少しているが、教職員個人の意識としては業務改善の更なる見直しが必要だと考える。校務分掌や学校行事の見直しや業務の分担をしていき、教員の健康面・精神面の負担を減らすだけではなく、教育の質も確保していく必要がある。 ・他は全体的に達成できており、成果が見られた。新研究に向けて研究を進めていくことはもちろん、令和8年度の部活動の募集停止に向けた取組や制服の見直し、学校行事の精選など引き続き継続して行っていく。
----------------------------	---